

助成年度：2021 年度

[所属] 北九州市立自然史・歴史博物館

[役職] 学芸員

[氏名] 中原 亨

[課題]

繁殖期の希少海鳥 2 種の行動に基づいた洋上風発建設リスクの評価

[内容]

九州北部では、洋上風発の建設計画が複数進んでいる一方で、カンムリウミスズメとヒメクロウミツバメという 2 種の希少な小型海鳥が繁殖している。前者は潜水採餌、後者は水面採餌と、採餌形態が異なっており、これは利用海域や行動圏の差異を生むため、種毎に風発建設の影響予測を行う必要がある。本研究では、繁殖期の両種を捕獲して GPS ロガーによる遠隔追跡を行い、行動・移動パターンの把握を試みた。その結果、福岡県宗像市の小屋島で繁殖する 1 個体のカンムリウミスズメと 2 個体のヒメクロウミツバメの各 1 回の採餌トリップの記録に成功した。追跡したカンムリウミスズメは小屋島から飛行して南下し、島から 30~54 kmほど離れた海域で重点的に採餌を行った後、再び飛行して帰島するという移動を行っていた。一方、ヒメクロウミツバメは小屋島から北上し、島から 128~296 kmほど離れた韓国沿岸まで移動して重点的に採餌を行った後、帰島するという移動を行っていた。2 種の利用していた海域は全く異なっており、それぞれクロロフィル a 濃度勾配が大きい海域や相対的に高い海域であった可能性が示唆された。つまり、2 種はそれぞれ生産性の高い海域へ移動して重点的に採餌していたとみられる。カンムリウミスズメの採餌海域と似たクロロフィル a 濃度の海域は、洋上風発の適地とされる響灘沖付近にも及んでいたほか、ヒメクロウミツバメの採餌海域は韓国の大規模な洋上風発建設計画のある海域と一致していた。例数が少なく深い考察は難しいものの、2 種が小屋島から大きく離れた全く異なる海域まで移動し重点的に採餌しているということは、洋上風発建設の影響を検討する上で留意すべきことである。